

# 東上記

寺田寅彦

青空文庫



八月二十六日床を出でて先ず欄干に倚る。空よく晴れて朝風や、肌寒く露の小萩のみだ  
 れを吹いて葉鶏頭はげいとうの色鮮やかに穂先おおかた黄ばみたる田面たのもを見渡す。薄霧うすぎり北の山の  
 根に消えやらず、柿の実撒砂まきすなにかちりと音して宿夢しゆくむ拭うがごとくにさめたり。しばらく  
 くの別れを握手に告ぐる妻が鬢びんの後れ毛おくげに風ゆらぎて蚊帳かやの裾ゆらくと秋も早や立つめ  
 り。台所に杯盤はいばんの音、戸口に見送りの人声、はや出立いでたたと吸物の前にすわれば床の間  
 の三宝さんぼうに枳殻からたち飾りし親の情先ず有難ありがたく、この枳殻誤つて足にかけたれば取りかえて  
 よと云う人の情もうれし。盃一順。早く行て船室へ場を取りませねばと立上がれば婢僕親ひぼく  
 戚上あがり框かまちに集いて荷物つじを車夫に渡す。忘れ物はないか。御座りませぬ。そんなら皆さん御  
 機嫌きげんよくも云つた積りつもなれどや、夢心地なればたしかならず。玄関を出れば人々も砂利じやりを  
 鳴らしてついて来る。用意の車五輛口々に何やら云えどよくは耳に入らず。からくと引  
 き出せば後にまた御機嫌ごきげんようの声々あまり悪からぬものなり。見返る門柳監獄の壁にかく  
 れて流れる水に漣漪れんい動く。韋駄天いだてんを叱する勢いよく松が端まつはなに馳かけ付ければ旅立つ人見送る  
 人足にんそく船頭ののゝしる声々。車の音。端艇涯きしをはなれば水棹みさおのしづく屋根板にはら／  
 へと音する。舷ふなべりのすれあう音ようやく止んで船は中流に出でたり。水害の名残なごり棒ぼう堤づみに

しるく砂利に埋るゝ蘆あしもあわれなり。左側の水楼に坐して此方こつちを見る老人のあればきつと  
中ちゆうぶう風よとはよき見立てと竹村はやせば皆々笑う。新地しんちの絃歌げんか聞えぬが嬉うれしくて丸山台  
まで行けば小蒸汽こじようき一艘そう後より追越して行きぬ。

昔の大名そのの君、すれちがいし船の早さに驚いてあれは何船と問ひ給えば御附きの人々かしこまりて、あれはちがい船なればかく早くこそと御答え申せば、さらばそのちがい船を造れと仰せられし勿もつた体なさと父上の話に皆々またどつと笑う間に船は新田堤にかかる。並んで行く船に苅谷氏も乗り居てこれも今日の船にて熊本へ行くなりとかにてその母堂も船窓より首さしのべて挨拶する様ちと可笑おかしくなりたれど、じつところゆるうちさし込む朝日暑ければにや障子びたりとしめたり。程なく新高知丸の舷げんそく側につけば梯子はしごの混雑例のごとし。荷物を上げ座もかまえ、まだ出帆には間もあればと岩亀亭がんきていへつけさせ昼飯したゝむ。江上油のごとく白鳥飛んでいよいよ青し。欄下の溜池うみがにに海蟹はさみの鉢動はきみかす様がおかしくて見ておれば人を呼ぶ汽笛の声に何となく心急せぎ立ちて端艇出させ、道中はことさら気を付けてと父上一句、さらば御無事でと子供等の声々、後に聞いて梯子はしご駆け上れば艫ともに水白く泡立ってあたりの景色廻り舞台のようにくるゝと廻ってハンケチ帽子をふる見送りの人々。これに応ずる乗客の数々。いつの間にか船首をめぐらせる端艇小さくな

りて人の顔も分き難くなれば甲板かんぱんに長居は船暈ふなよひの元と窮屈なる船室に這はい込み用意の葡萄酒一杯に喉うづろを沾ぬして革靴枕かはんに横になれば甲板にまたもや汽笛の音。船は早や港を出るよと思えど窓外を覗のぞく元氣もなし。『新小説』取り出でて読む。宙外ちゅうがいの「血桜」二、三頁読みかくれば船底にすさまじき物音して船体にわかに傾けり。皆々思わず起き上がる。港口浅せたるためキールの砂利に触るゝなるべし。あまり氣味よからねば半頁程の所読んではいたれど何がかいてあつたかわからざりしも後にて可笑しかりける。船の進むにつれて最早もはや氣味悪き音はやんで動揺はようやく始まりて早や胸悪きをじつと腹をしめて専もっぱら小説に氣を取られるように勉つとむればようゝに胸静まり、さきの葡萄酒の酔心。ほつとしていつしか書中の人となりける。ボーイの昼食をすゝむる声耳に入りたれどもとより起き上がる事さえ出来ざる吾われの渋茶一杯すゝる氣もなく黙つて読み続けるも実はこのようなる静穩の海上に一杯の食さえ叶かなわぬと思われん事の口惜くちおしければなり。

一篇広告の隅々まで読み終りし頃は身体ようやく動揺になれて心地やゝすがゝしくなり、半なかば身を起して窓外を見れば船は今室戸岬むろとぎきを廻るなり。百尺岩頭燈台の白堊はくあ日にかがやいて漁舟の波のうちに隠見するもの三、四。これに鷗かもめが飛んでいたと書けば都合よけれども飛魚とびうお一つ飛ばねば致し方もなし。舟傾く時海また傾いて深黒なる奔潮天と地との

間に向つて狂奔するかと思わるゝ壯觀は筆にも言語にも尽すべきにあらず。甲<sup>かん</sup>の浦沖<sup>うら</sup>を過ぐと云う頃ハツチより飯<sup>めし</sup>櫃<sup>びつ</sup>膳<sup>ぜん</sup>具<sup>ぐ</sup>を取り下ろすボーイの声<sup>や</sup>ハケましきは早や夕飯なるべし。少し大胆になりて起き上がり箸を取るに頭思いの外<sup>ほか</sup>に軽くて胸<sup>い</sup>も苦しからず。隣りに坐りし三十くらいの叔母様の御給仕<sup>かたじけな</sup>忝<sup>かたじけな</sup>しと一碗を傾くればはや厭<sup>いや</sup>になりぬ。寺田寅彦さんと云う方は御座らぬかとわめくボーイの濁<sup>だみ</sup>声<sup>ごえ</sup>うるさければ黙つて居けるがあまりに呼び立つる故オイ何んだと起き上がれば貴方<sup>あなた</sup>ですかと怪訝<sup>けげん</sup>顔<sup>が</sup>なるも氣の毒なり。何ぞと言葉<sup>や</sup>を和<sup>わ</sup>らげて聞けば、上等室の苅谷<sup>さつそく</sup>さんからこれを貴方へ、と差出す紙包あくれば梨子<sup>なし</sup>二つ。有難しとボーイに礼は云うて早速<sup>さつそく</sup>頂戴するに半分ばかりにして胸つかえたれば勿体なければ残り窓から外へ投げ出してまた横になれば室内ようやく暗く人々の苦にせし夕日も消えて甲板を下り来る人多くなり、窮屈さはいつそう甚だしけれど吾一人にもあらねば致し方もなし。隣りに言葉訛<sup>なま</sup>り奇妙なる二人連れの饒<sup>じょう</sup>舌<sup>ぜつ</sup>もいびきの音に變つて、向うのせなあが追<sup>おい</sup>分<sup>わけ</sup>を歌い始むれば甲板に誰れの持て来たものか轡<sup>くつわ</sup>虫<sup>むし</sup>の鳴き出したるなど面白し。甲板をあちこちする船員の靴音がコツリ／＼と言文一致なれば書く処なり。夢魂いっしか飛んで赴く処は鷹<sup>たか</sup>城<sup>じょう</sup>のほとりなりけん、なつかしき人々の顔まぎ／＼と見ては驚く舷側の潮の音。ねがえりの耳に革靴の仮枕いたずらに堅きも悲しく心細くわれながら

浅猿<sup>あさま</sup>しき事なり。残夢再びさむれば、もう神戸<sup>こうべ</sup>が見えますると隣りの女に告ぐるボーイの  
 声。さてこそとにわかに元氣つきて窓を覗<sup>のぞ</sup>きたれど月なき空に淡路<sup>あわじ</sup>島も見え分かず。再  
 びとろくとして覚むれば船は既に港内に入つて窓外にきらめく舷燈の赤き青き。汽笛の  
 吼<sup>ほ</sup>ゆるごとき叫ぶがごとき深夜の寂<sup>せき</sup>寞<sup>ばく</sup>と云う事知らぬ港ながら帆柱にゆらぐ星の光はさ  
 すがに静かなり。革靴と毛布と蝙蝠<sup>こうもり</sup>傘<sup>がさ</sup>とを両手一ぱいにかかえて狭き梯子を上つて甲板  
 に上がれば既に船は棧<sup>さんばし</sup>橋へ着きていたり。荻谷氏に昨夕の礼をのべて船を下り安松へ上  
 がる。岡崎賢七とか云う人と同室へ入れられ、宅<sup>うち</sup>へ端書<sup>はがき</sup>したゝむ。時計を見ればまだ三時  
 なり。しかし六時の急行に乗る積りなれば落付いて眠る間もなかるべしと漱石師などへ用  
 もなき端書したゝむ。ラムネを取りにやりたれど夜中にて無し、氷も梨も同様なりとの事  
 なり。退屈さの茶を啜<sup>すす</sup>れば胸ふくれて心地よからず。とかくするうち東の空白み渡<sup>あかね</sup>りて茜  
 の一抹<sup>いちまつ</sup>と共に星の光まばらになり、軒下に車の音しげくなり、時計を見れば既に五時半  
 なり。急いで朝飯かき込み岡崎氏と停車場に馳<sup>か</sup>けつくれば用捨<sup>ようしやげ</sup>気もなき汽車進行を始め  
 て吐き出す煙の音乗り遅れし吾等を嘲るがごとし。珍しき事にもあらねど忌<sup>いま</sup>々しきもの  
 なり。先ず荷物を預けんとて二人のを一緒に衡<sup>はか</sup>らす。運賃貳円とは馬鹿々々しけれど致し  
 方もなし。楠公<sup>なんこう</sup>へでも行くべしとて出立<sup>いでた</sup>たとせしがまてしばし余は名古屋にて一泊す

れども岡崎氏は直行なれば手荷物はやはり別にすべしとて再び切符の切り換えを求む。駅員の不機嫌顔甚だしきも官線はやはり官線だけの権力とか云うものあるべしと、かしこみて願ひ奉りようよう切符を頂戴して立ちいずれば吹き上ぐる朝嵐に藁帽わらぼう飛んでぬかるみを走る事数間すうけん、ようやく追い付きて取止めたれど泥にまみれてあまり立派ならぬ帽の更に見ばえを落したる重ねくの失敗なり。旅なればこれも腹は立たず。元町もとまちを線路に沿うて行く。道傍の氷店に入つてラムネ一瓶に夜来の渴望も満たしたればこゝに小荷物を預けて楠公祠なんこうしまで行きたり。亀の遊ぶのを見たりとて面白くもなし湊川みなとがわへ行て見んとて堤を上る。昼なれば白面の魍魎りようみも影をかくして軒を並ぶる小亭閑かんとして人の氣あるは稀なり。並木の影涼しきところ木の根に腰かけて憩いこえば晴嵐せいらん梢を鳴らして衣に入る。枯枝を拾いて砂に嗚呼忠臣ああなど落書すれば行き来の人吾等を見る。半時間ほども兩人無言にて美人も通りそうにもなし。ようよう立上がりて下流へ行く。河とは名ばかりの黄色き砂に水の氣なくて、照りつく日のきらめく暑そうなり。川口に当りて海面鏡のごとく帆船の大き小さきも見ゆ。多門通りより元の道に出てまた前の氷屋に一杯の玉壺を呼んで荷物を受取り停車場に行く。今ようやく八時なればまだ四時間はこゝに待つべしと思えば堪えられぬ欠伸あくびに向うに坐れる姉様けぐん顔して吾を見る。時これ金と云えばこの四時間金



に当るや知らねどあくびと煙草たばこの煙に消すも残念なり、いぎや人物の觀察にても始めんと目を見開けば隣りに腰かけし印しるし半天はんてんの煙草の火を借らんとて誤りて我が手に火を落しあわてて引きのけたる我がさまの吾ながら可笑しければ思わず噴き出す。この男バナナと隠元豆いんげんまめを入れたる提籠さげかこを携えたるが領えりしるしの水雷亭とは珍しきと見ておればやがてベンチの隅に倒れてねてしまいける。富米野と云う男熊本にて見知りたるも来れり。同席なりし東も来り野並も来る。

こゝへ新あらたに入り来りし二人連れはいずれ新婚旅行と見らるゝ御出立おんいでたち。すじ向いに座を構えたまうを帽ひさしの底よりうかゞい奉れば、花の御かんばせすこし瘦せたまいて時々小声に何をか物語りたまう双頬そうきょうに薄紅さして面おもはゆげなり。人々の視線一度に此方こなたへ向かえば新郎のパナマ帽もうつつむきける。この二人間まもなく大阪行のにて去る。引きちがえて入り来る西洋人のたけ低く顔のたけも著しく短きが赤き顔にこればかり立派なる鬚ひげひねりながら煙草を人力じんりきに買わせて向側のプラットフォームに腰をかけ煙草取り出して鬚をかい上ぐるなどあまり上等社会にもあらざるべし。これと同じ白衣着けたる連れの男は顔長く頬髯ほおひげ見事なれど歩み方の変なるは義足なるべし。この間改札口幾度か開かれたまた閉じられて汽笛の止む間もなし。人來り人去つていつまでも待合の隅に居残るは吾等のみなるぞ

つまらなき。ようやく十二時となりて、プラットフォームに出でんとすればこの次のなり  
とてつきかえされし、重ね／＼の失敗なりける。ようやくにして新橋行のに乗り込む。客  
車狭くして腰掛のうす汚きも我慢して座を占むれば窓外のもの動き出して新聞売の声後  
になる。右には未だ青き稲田を距てて白砂青松の中に白壁の高樓蟹の塩屋に交じり、その上  
に一抹の海青く汽船の往復する見ゆ。左に従い来る山々山骨黄色く現われてまばらなる  
小松ちびけたり。中に兜の鉢を伏せたらんがごとき山見え隠れするを向いの商人体の男に  
問う。何とか云いしも車の音に消されて判らず。再三問いかえせしも訛の耳なれぬ故か終  
にわからず。気の毒にもあり可笑しくもあれば終にそのままに止みぬ。後にて聞けば甲  
山と云う由。あたりの山と著しく模様変れるはいずれ別に火山作用にて隆起せるなるべ  
し。これのみは樹木黒く茂りたり。

蟬なくや小松まばらに山禿たり

など例の癖そろ／＼出で来る。大阪にて海南学校出らしき黒袴下り、乗客も増したり。  
幸いに天気あまり暑からざればさまでに苦しからず。山崎を過ぐれば与一兵衛の家はと聞  
けど知る人なし。勘平らしき男も見えず、ただ隣りの男の眼付や、定九郎らしきばか  
りなり。五十くらいの田舎女の櫛取り出して頻りに髪梳るをどちらまでと問えば「京まで

行くのでがんす。息子が来いと云いますのでなあ」と言葉つき不思議なるを、国はと問えば広島近在のものなる由。飾り氣一点なきも横訥ぼくとつのさま氣に入りてさま／＼話しなどするうち京都々々と呼ぶ車掌の聲にあわたゞしく下りたるが群集の中にかくれたり。京に入りて息子とかの宿に行くまでの途中いさゝか覺束なく思わるゝは他人のいらぬ心配かは知らず。やがて稲荷いなりを過ぐ。伏見人形に思い出す事多く、祭り日の幟立のぼり並ぶ景色に松茸まつたけ添えて画きし不折ふせつの筆など胸に浮びぬ。山科やましなを過ぎて竹藪ばかりの里に入る。左手の小さき岡の向うに大石内蔵助くららのすけの住家今に残れる由。先ずとなせ小浪こなみが道行姿みちゆきすがたに浮ぶも可笑おかし。やゝ曇り初めそし空に篁たかむらの色いよく深くして清く静かなる里のさまいとなつかくしく、願わくば一度は此処ここにしばらくの仮りの庵いおりを結んで篁の虫の声小田おだの蛙かわずの音にうき世の塵けがに汚はられたる腸はらわたすゝがんなど思いうち汽車はいつしか上り坂にかゝりて両側の山迫り来る。山田の畔あぜにしろいのごとき草花面白きは何と云うものにや。この辺りまで畑打つ男女何処どことなく悠長に京びたるなどもうれし。茶畑多くあり。春なれば茶摘みの様汽車の窓より眺めて白手拭の群にあばよなどするも興あるべしなど思ひける。大谷おおたにに着く。この上は逢坂おうさかなり。この名を聞きて思い出す昔の語り草はならぶるも管くだなるべし。さねかずらとはどんなものかしらず、薦つたは這いでる崖に清水したゝって線路脇の小溝に落つる音涼し。

窓より首さしのべて行手を見るに隧すいどう道眼前に然ようぜんとして向うの口錢くちぜにのまわりほどに見ゆ。これを過ぐれば左に鳩におの海蒼うみくして漣漪水色縮ちりめん緬を延べたらんごとく、遠山糲糊もことして水の果ても見えず。左に近く大津の町つらなりて、三井寺木立に見えかくれす。唐からさ崎きはあの辺かなと思えど身地を踏みし事なければ堅田かただも石山も栗津あわづもすべて判らず。九つの歳父母に従うて東海道を下りし時こゝの水楼に魚はやの塩焼の骨と肉とが面白く離るゝを面白がりし事など思い出してはこの頃の吾なつかしく、父母の老い給いぬる今悲しかり。さては白灣子はくわんしと共に名古屋に遊びし帰途伊勢を経て雪夜こゝに一夜を明かせし淋しさなどもさま／＼偲おもばる。草津の姥うばが餅もちも昔のなじみなれば求めんと思ううち汽車出でたれば果さず。瀬田せたの長橋渡る人稀に、蘆荻ろてきいたずらに風に戦そよぐを見る。江心白帆の一つ二つ。浅き汀みぎわに簾すだれ様のもの立て廻せるは漁りの業わざなるべし。百足山昔に変わらず、田原たわら藤太とうたの名と共にいつまでも稚おさなき耳に響きし事は忘れざるべし。湖上の景色見飽かざる間に彦根城いつしか後になり、胆吹山いぶきやまに綿雲這いて美濃路みのじに入れば空は雨模様となる。大垣の商人らしき五十ばかりの男頻しきりに大垣の近況を語り関が原の戦せきを説く。あたりようやく薄暗く工夫こうふてい体の男甲かんばし走りたる声張り上げて歌い出せば商人の娘堪えかねてキへと笑う。長良川木曾川いつの間にか越えて清洲と云うに、この次は名古屋よと身支度みじたくする間に電

燈の蒼白き光曇れる空に映じ、はやさらばと一行に別れてプラットフォームに下り立つ。  
 丸文まるぶんへと思ひしが知らぬ家も興あるべしと停車場前の丸万と云うに入る。二階の一室狭  
 けれども今宵こよいはゆるやかに寝るべしと思えば船中の窮屈きうくつさ蒸暑むしあつさにくらべて中々に心安  
 かり。浴後の茶漬も快く、窓によれば驟雨しゅうう沛然はいぜんとしてトタン屋根を伝う点滴の音すゞ  
 しく、電燈の光地上にうつりて電車の往きかう音も騒がしからず。こうなれば宿帳つけに  
 来し男の濡れ髪かき分けたるも涼しく、隣室にチリンと鳴るコップの音も涼しく、向うの  
 室の欄干よに寄りし女の白き浴衣ゆかたも涼しげなり。昨日よりの疲れ一時に洗い去られしように  
 てからだのびくとなる。手を拍うちて床とこをのべさせ横になれば新しき浴衣の肌さわりも快  
 く、隣室の話声遠きように聞えし後は魂たまいずこへか飛んで藻ぬけの殻となり電燈消しに来  
 し事もいつか知らず。円まじかなる夢百里の外に飛んで眼覚むれば有明の絹燈蚊帳かやの外おぼろに、  
 時計を見れば早や五時なり。手洗い口すゞぎなどするうち空ほの／＼と明けはなれたる  
 が昨夜の雨の名残まだ晴れやらず、蚊帳をまくる風しめつぽきも心悪からず。膳に向かえ  
 ば大野味噌汁。秋琴楼しゅうきんろうに仮寓かぐうの昔も思ひ出さしむ。勘定をすませ丸く肥え太りたる脊せい  
 低き女に革靴さ提げさして停車場へ行く様、瘦馬と牝豚の道行みちゆきとも見るべしと可笑おかし。こ  
 の豚存外さうじに心利きたる奴にて甲斐々々しく何かと世話しくれたり。間もなく駆け来る列車

の一隅に座を構えて煙草取り出せばベルの音忙しく合図の呼子。汽笛の聲。熱田の八剣森陰より伏し拝みてセメント会社の煙突に白灣子と焼芋かじりながらこのあたりを徘徊せし當時を思い浮べては宮川行の夜船の寒さ。さては五十鈴の流れ二見の浜など昔の草枕にて居眠りの夢を結ばんとすれどもならず。大府岡崎御油など昔しのぼるゝ事多し。豊橋も後になり、鷺津より舞坂にかゝる頃よりは道ようやく海岸に近づきて浜名の湖窓外に青く、右には遠州洋杳として天に連なる。漁舟江心に向かいてこぎ出せば欸乃風に漂うて白砂の上に黒き鳥の群れ居るなどは『十六夜日記』そのままなり。浜松にては下りる人乗る人共に多く窮屈さ更に甚だしくなりぬ。掛川と云えば佐夜の中山は見廻せど僅かに九歳の冬此処を過ぎしなればあたりの景色さらに見覚えなく、島田藤枝など云う名のみ耳に残れるくらいなれば覺束なし。金谷の隧道長くて灯を点したる、これは昔蛇の住みし穴かと云いししれ者の事など思い出す。静岡にて乗客多く入れ換りたれど美人らしきは遂に乘らず。東の方は村雨すと覺しく、灰色の雲の中に隱見する岬頭いくつ模糊として墨絵に似たり。それに引きかえて西の空麗しく晴れて白砂青松に日の光鮮やかなる、これは水彩画にも譬うべし。雨と晴れとの中にありて雲と共に東へくへ行くなれば、ふるかと思えば晴れ晴るゝかと思えばまた大粒の雨玻璃窓を斜に打つ変幻極ま

りなき面白さに思わ<sup>まどべり</sup>ず窓縁をたたいて妙と呼ぶ。車の音に消されて他人に聞えざりしこそ仕合せなりける。

大井川の水涸<sup>か</sup>れくにして蛇籠<sup>じやかご</sup>に草離々たる、越すに越されざりし「朝<sup>あさ</sup>貌<sup>が</sup>日記」何とかの段は更なり、雲<sup>くも</sup>助<sup>すけ</sup>とかの肩によつて渡る御侍、礮<sup>かわら</sup>に錫<sup>しゃく</sup>杖<sup>じよう</sup>立てて歌よむ行脚<sup>あんぎや</sup>など廻り燈籠のように眼前に浮ぶ心地せらる。街道の並木の松さすがに昔の名残を止むれども道脇の茶店いたずらにあって鳥毛<sup>とりげは</sup>挟箱<sup>さみばこ</sup>の行列見るに由なく、僅かに馬士<sup>まごうた</sup>歌の哀れを止むるのみなるも改まる御代<sup>みよ</sup>に余命<sup>みよ</sup>つなぎ得し白髪<sup>おうな</sup>の媼<sup>いろうり</sup>が囲炉裏のそばに水漬<sup>みずばな</sup>すゝりながら孫<sup>やしやご</sup>玄孫への語り草なるべし。

このあたりの景色北斎<sup>ほくさい</sup>が道中画譜をそのままなり。興津<sup>おきつ</sup>を過ぐる頃は雨となりたれば富士も三保<sup>みほ</sup>も見えず、真青なる海に白浪風に騒<sup>さわ</sup>ぎ漁<sup>すなど</sup>る船の影も見えず、磯辺の砂雨にぬれてうるわしく、先手の隧<sup>ずい</sup>道<sup>どう</sup>もまた画中のものなり。

此処小駅ながら近來海水浴場開けて都府の人士の避暑に来るが多ければ次第に繁昌する由<sup>い</sup>なり。岩淵<sup>いわぶち</sup>の辺<sup>か</sup>甘蔗<sup>かんし</sup>畑<sup>よばたけ</sup>多くあり。折から畑に入るゝ肥料なるべし異様のかおり鼻を突きて静岡にて求めし弁当開ける人の胸悪くせしも可笑しかりける。沼津を過ぐれども雨雲ふさがりて富士も見えず。

御<sup>ご</sup>殿<sup>てん</sup>場<sup>ば</sup>にて乗客更に増したる窮屈さ、こうなれば日の照らぬがせめてもの仕合せなり。  
小山<sup>おやま</sup>。山<sup>やま</sup>北<sup>きた</sup>も近づけば道は次第上りとなりて溪流脚下に遠く音あり。一<sup>いち</sup>八<sup>はつ</sup>の屋根に鶏  
鳴きて雨を帯びたる風山田に青く、車中には御殿場より乗りし爺<sup>や</sup>が提<sup>さ</sup>げたる鈴虫<sup>しんむし</sup>なども、  
海拔幾百尺の静かさ淋しささま／＼に嬉しく、哀れを止むる馬士歌の箱根八里も山を貫  
き溪<sup>たに</sup>をかける汽車なれば関<sup>せき</sup>守<sup>もり</sup>の前に額<sup>ひたい</sup>地にすりつくる面倒もなければ煙草一服の間に山  
北につく。ひとしきり来る村雨に鮎<sup>すし</sup>の鮎<sup>すし</sup>売<sup>う</sup>る男の袖しとゞなるもあわれ。このあたり複線  
路の工事中と見えたり。山霧深うして記号標の芒<sup>すき</sup>の中に淋しげなる、霜夜の頃やいかに淋  
しからん。

これより下り坂となり、国府津<sup>こうづ</sup>近くなれば天また晴れたり。今越えし山に綿雲かゝりて  
其処とも見え分かず。さきの日国府津にて宿を拒まれようやくにして捜し当てたる町外れ  
の宿に二階の絃歌を騒がしがりし夕、夕陽の中に富士足<sup>あしがら</sup>柄<sup>がら</sup>を望みし折の嬉しさなど思い  
出してはあの家こそなど見廻すうちにこゝも後になり、大磯<sup>おおいそ</sup>にてはまた乗客増す。海水  
浴がえりの女の群の一樣に大なる蓑帽子かぶりたるなど目に立つ。柵の外より頻<sup>しき</sup>りに汽車  
の方を覗く美髯公<sup>びぜんこう</sup>のいづれ御前<sup>ごぜん</sup>らしきが顔色の著しく白き西洋人めくなど土地柄なるべ  
し。立派なる洋館も散見す。大船<sup>おおふな</sup>にて横須賀行の軍人下りたるが乗客はやはり増すばか



りなり。隣りに坐りし静岡の商人二人しきりに関西の暴風を語り米相場を説けば向うに腰かけし文身いれずみの老人御殿場の料理屋の亭主と云えるが富士登山の景況を語る。近頃は西洋人も婦人まで草鞋わらじにて登る由なりなどしきりに得意の様なりしが果ては問わず語りに人の難儀をよそに見られぬ私の性分までかつぎ出して少時しばしも饒舌しゃべり止めず、面白き爺さんなり。程が谷ほどや近くなれば近き頃の横浜の大火乗客の話柄わへいを賑わす。これより急行となりたれば神奈川鶴見などは止らず。夕陽海に沈んで煙波ようば香たる品川の湾に七砲台おぼろなり。何の祝宴か磯辺の水楼に紅燈山形につるして絃歌湧き、沖に上ぐる花火夕闇の空に声なし。洲崎の灯影長うして江水漣漪れんい清く、電燈煌こうとして列車長きプラットフォームに入れば吐き出す人波。下駄の音靴のひゞき。

(明治三十二年九月)



# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 東上記

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>